

昭和の室町問屋と職人たち 2 : 絹の大衆化

OKAMOTO, Keiko / 岡本, 慶子

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

83

(発行年 / Year)

2024-02-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030872>

昭和の室町問屋と職人たち 2

——絹の大衆化——

岡本 慶子

1 はじめに

「昭和の室町問屋と職人たち—友禪とイノベーション」(『国際日本学』第20号所収)では型友禪の技術が確立した大正時代後半から太平洋戦争までの京都繊維業界の様子を、友禪を主力商品として取扱った京都室町問屋と職人の活動から検証した。この時代は型友禪の技術の発展に伴って染呉服の取り扱いが増加し、昭和恐慌を経験しても発展をつづけた時代だった。

しかし、友禪に焦点をあてたために、京都繊維業界の全体感に触れる事が出来なかった。京都は友禪だけでなく西陣織の産地でもあり、室町問屋は大正から昭和にかけて京都産地に限らず、日本各地の絹や人造繊維の商品の取り扱いを拡大した時期だった。この時期の室町問屋や職人たちのこと、彼らが作り販売していた商品については、当時の資料からは具体的な事象をつかむことは難しかった。しかし、戦後に関する資料を集めている時、戦前から室町や西陣で働いていた人たちが昔を語る記事に出会った。さらに社史や業界成功者の自伝などにも戦前の様子が語られていた。

それらによると、大正・昭和時代は、それまで高級品だった絹が一般に広がった時代で、キモノが多様化し、そのため商品の格差が生まれ、しかしながら景気が拡大した時代であった。そして、戦後の室町業界はこの戦前の室町を目指して再興しようとしていたことが強く感じられた。戦後の呉服業界を理解する上で戦前の室町の概要をつかむことは重要な背景と考え、資料から室町問屋の取扱商品や商売の様子を集め、研究ノートとしてまとめることとした。

まず大正・昭和時代の超特権階級の一人であった第 19 第尾張徳川義親夫人の徳川米子様の着用されたキモノの回顧と、三越の店員の回想を交えて当時の上流階級のキモノの概要をつかむ。次に大衆商品の広がりを、商品企画や生産を行った室町問屋、西陣機業の当時の様子と市場動向から把握を試みる。

2 徳川米子様のキモノ

日露戦争（1904 - 1905）の頃に西陣機業に入店した真下百三郎氏（1892 - 19??）によると、当時は日清（1894 - 1895）、日露戦争による景気の良し悪しはあったものの、質素儉約が基本で流行と言うものがそれほどなく、男女ともに染物も織物も地味で渋さを主としたものを着用していたという¹⁾。

大正時代になると第一次大戦、震災、世界恐慌と景気は乱高下し、それに合わせて室町の商売も繁盛と倒産を引き起こすような不景気とを繰り返していた。景気が良くなる度に業界には新規参入者が増加し、可処分所得を得た消費者が新たな大衆となっていた。その大衆に向けて商品の多角化が進み、華やかなものが増加し、技術の進歩もあり年々流行の変化が激しくなっていた²⁾。

三越をはじめ明治終盤から大正初期に百貨店となった呉服店は、それまでの超上流階級向けの誂え品に加えて、新興特殊階級向けの仕入れ品、そして大衆向けの低価格量産品（キモノ、帯だけに限らず襦袢、下着、半襟、紐類、足袋、ショール、草履、下駄、バッグなど）を多品種揃えることとなり、関東大震災後にはそれまでの座売りを廃止し、大衆向けの安価な商品から順次陳列販売するようになった。

1966年11月の業界紙『そめとおり』³⁾に、「この明治大正昭和を通じて、最高級の貴婦人といえば徳川米子夫人」と紹介されている徳川米子様は、そのインタビューで昔のキモノについて下記のように語っている。徳川米子様（1892 - 1980）は第 18 代尾張徳川義禮の一人娘であり、松平春嶽の五男から徳川家の養子となった第 19 第尾張徳川義親（元公爵）の夫人である。

米子様の話（要約）⁴⁾

私が13歳のお祝いには、当時住んでいた名古屋の松坂屋さんで京都嵐山の全景を桜と若葉とで模様にした振袖を別誂えしてもらいました。お茶の水の学生時代は、キモノは銘仙の矢絰、十の字絰、井桁絰といったものにエビ茶の袴で、髪はおさげにして頭の上に大きなりボンをつけて、黒の編み上げの靴を履いていました。明治期の女学生の服装でしたが、当時としてはハイカラな女学生姿であり、インテリ女性

の姿でした。その後は、色留袖と黒留袖が主なキモノになりますが、一般は黒が格上で、宮中関係は色が格上のため、徳川をはじめその他の場合は黒留袖、宮内省の御招待で宮様の所へ訪問する時は色留袖、ということになっていました。

あの当時（大正時代）は丸帯の時代で、それも染め加工帯の時代でしたので、着物と帯のコンビネーションで好き放題なキモノを作ることができました。おめでたい時に着るのにふさわしい黒留袖には大漁舟に旗を立てて、鉢巻半纏姿で喜び勇んでいる漁師の姿を小柄の集団で表現して、帯には青海波という風にコンビネーションを良くしました。

また、30-40代の頃（大正～昭和の初め頃）には、ネツ地（鼠色の地色）の色留袖に風神雷神を描き、つづれの丸帯には黒字に朱と金で稲妻を表現しました。これは仲人をした時とか、お呼ばれの場合に着た事を覚えています。その他、黒の紋付として、鹿二匹を裾に描き、つづれ丸帯には真っ赤な紅葉を表現しました。これは三越を通して大彦で作ったと思います。キモノと帯とをコンビネーションにしないと着ている気がしませんし、それは別注しなければありませんでした。

他には、色紋付のキモノに牡丹唐草を金と銀で描き、帯には唐獅子。夏物の平緞の色紋付にはキモノに流水模様と釣りの浮き、帯には鮎と笹としたり、黒留のキモノに大名行列を二段の構図で描き、帯は能衣装と言うのもありました。

買い物はほとんど三越と細かいものは松坂屋でした。私が難しい注

文するときには、衣装考案部から模様師の方まで家に連れてきて注文をしたり、絵を描いたりしました。

仲人は何十組したのか、あまりにも多くて覚えていません。宮様の華族へのご降嫁という場合の仲人は、まず結納、式、披露宴、お里びらき、それから方々へのご披露、召使の方々にもご披露というように、3日も4日も続くわけですから、着たきり雀の黒留袖というのはいきませんので、その度に着替えて出ます。だから黒留袖だけでも十枚以上持ち揃えている必要がありました。

でも、どんどん新調するので着古したものは皆、人にあげてしまっ
て残っていません。いつもタンスの中とか土蔵の中はいっぱいで、全て松坂屋さんに整理を任せていました。毎朝11時に担当の方が「おはようございます」と言ってお勝手から入って見るので、必要なものを探してもらいました。

その他、おしゃれ着尺と申すものはどうでもよいものでございますから、そういうものは仕入品（既製反物）で間に合いました。小紋や御召のほか、関東大震災後に着るようになった訪問着などは、礼服用の染紋ではなく縫い紋をつけていたのでこれらのキモノのことを「縫い紋」と呼んでいました。正式の染紋は定紋を五つ付けますが、正式でない場合は影紋を数種類作って、好みに合わせて一ツ紋か三ツ紋にしていました。「今日は、大した場所じゃないから縫い紋でいいじゃない」とか申して、帝劇とか、ホテルなどにはいい加減な着物を着ていったものでした。羽織は玄関で脱ぐものだったので、着ませんでした。

超特殊階級である米子様の装いは当時の日本人には手の届かないキモノであっただろうが、「次の流行は、徳川サンの奥様の御キモノに、最大のヒントがある」と紹介されているように、そのキモノや着こなしは当時の日本人の憧れであったことがうかがえる。礼装用のキモノは染物や刺繍が常だったが、染帯も流行していたと記載があり、訪問着も生まれているので、模様染が増加していたことが伺える。これら、米子様が詠えた儀礼服や仕入品の小

紋、御召や訪問着は一般人にとっては「いつかは手に入りたい」キモノとなり、そして市場には値ごろに抑えた大衆向け式服、小紋、御召、訪問着が投入されていくこととなった。

3 明治・大正・昭和の三越

米子様が中振袖を誂えたのは、数えて13歳とすると、1902-3(明治35-6)年頃で、留袖を作った時期は結婚した1909年以降から1930年代頃と考えられる。1911(明治44)年に三越本店に入店した山崎肇氏は大正時代の中振袖と訪問着の販売は下記のようなようであったと振り返っている。山崎氏は入店後、売場、考案部、大衆呉服部を経験し1937(昭和12)年からは大阪店勤務も経験している。1960年代前半に呉服部長の時に三越を勇退している。

中振袖 (要約)⁵⁾

大正初期(1912年頃)には月末に各売り場の在庫を記載(棚卸)していた。中振袖の在庫はいつも3-5枚しかなかった。中振袖というのは背が伸び切っていない12-3歳の小娘向きのもので、振袖を着ると袖を床に引きずってしまうため、袖の長さは本人の身長に合わせて決めていた。姉の結婚式に出席するなどのために用意するのだが、身長はすぐに伸びてしまい、すぐに着なくなってしまう。そのような中振袖を、三越では手描きで共八掛の五つ紋付という贅沢を極めて別誂えすることが多かった。だから、仕入品の在庫がわずかだったのである。つまり、それほど中振袖を作る顧客は超上層階級の顧客だったということである。

この話から徳川米子様の十三参りの振袖は山崎氏が述べる松坂屋誂えの中振袖であったことが想像できる。その頃、中振袖を誂える人たちは10代の若い娘を持つ上流階級の人たちであり、振袖は主に婚礼衣装として用いられていた⁶⁾。さらに、下記へ続く。

訪問着（要約）⁷⁾

訪問着と言うのは、第一次世界大戦（1914 - 1918年）の好景気の頃、形式ばらずに気軽に来て行ける略式の礼服が求められるようになり、色留袖を簡略化した準礼装として大正6年に三越が売り出した。これが震災（1923年）後、中流以上の家庭の間でブームとなり、昭和初めころから問屋の仕入れ品として出回り始めた。

景気が良くなり社交界が盛んになると、豪華と絢爛さを競い合うようになり、「訪問着では…軽っぼいし」「訪問着の袖を長くして呉れ」「本振袖の袖を短くしてくれ」「共八掛ぢや、重苦しくて仕様がな」「共八掛はいらない」「縫い紋ではいけないから染め抜き紋にして欲しい」「堅苦しくない場所だから、縫い紋が良い」と様々な注文が増えてきた。そこで、訪問着の袖を長くして、三つ紋か五つ紋の手描き中振袖の仕入れ品が昭和10年代に入ると増加しブームとなった。

震災後に豪華な中振袖や訪問着の需要が増していった様子は、昭和に入ってから問屋の展示会図録にこれら振袖、中振袖、留袖（色留袖含む）が中心に掲載されていた⁸⁾ことと重なる。豪華な呉服に手を出せる消費者の絶対数が増加したということである。

4 図案

百貨店はこの頃、意匠室を持っており、図案家も抱えていたが、百貨店が扱う呉服や関連商品は品数が多く、独自企画商品は一部に限ったことである。各百貨店は京都に仕入れ店を持ち、自社展示会⁹⁾で発表する商品は特定の間屋や職人と商品開発していた¹⁰⁾。多くの商品は、得意商品を持つ問屋がそれぞれの百貨店の好みに合わせて買い付けたり、企画提案をしていた。

そのため、問屋でもそれまでの「座売り」から「出張販売」へと営業体制を変換していった。前出の三越の山崎氏は模様染には不可欠な図案について下記のように語っている。

図案（要約）¹¹⁾

商業図案と言う言葉は明治の終わりから大正の初めにかけて使われ始めた。三越には考案部に50人ほどの図案家をかかえていたし、三越のオリジナル展覧会のため全国に図案募集もした。図案の応募は問屋の社長の名前でなされるので、三越内にいて図案家の名前を知る機会はなかった。他社に図柄が漏れることを大変恐れていたため、街の図案家に頼むようなことはしなかった。関東織物は縞や緋などが主な模様なので、図案と言えばやはり京都が中心だった。

私は図案家のことは詳しくないが、大正期になって考案部へ異動して京都に出張することが多くなってから、図案家として一家をなして有名だった晩年の上野清江（後の人間国宝上野為二の父）や加納秀峰を知った。彼らは小袖の参考本をたくさん蒐集していた。彼らを知ってから、始めて商品製造の経緯を詳しく知った。

そのころ千總専属の図案家が帝展の特選に入選したという話を聞いたことがあるが、奥行きのある本絵と平面で色の調和を重んじる図案は相反しているようで、本絵が上手になると図案がダメになって行くように感じていた。

徳川米子様の話に「どうでも良いキモノ、いい加減なキモノ」として染着尺が出てくるが、染着尺は一反の反物のまま、繰り返しの模様（送りが付いている図案）を型紙を使って染めた生地である。白と単色の細かい模様は小紋、多色の場合は型友禅と呼ばれ、図案開発が活発に行われた。昭和に入って（1926 - ）素材となる丹後縮緬の生産量が増えたこと、縮緬以外の素材も多数開発されたこと、人絹などの人造繊維が使われるようになったこともあり、加工数量が増加した。また染物は、織物よりも加工リードタイムが短く、鮮やかな色目で自由な模様を表現することができる上、素材と模様の組み合わせで普段着からよそ行きまで様々な用途に対応できる商品が作れるため、染呉服問屋や染工場、図案家の間で図案の研究が進んだ¹²⁾。問屋の求めに応じて、技法に即した（送りが付いていてすぐに次の工程に進める）図案を描く図案家が大勢生まれ、図案家協会も作られた。

5 西陣織

京染の他、室町問屋が主力に扱った商品の西陣織（御召、帯）がある。米子様が私服礼服の振袖や留袖に締めた丸帯や、観劇や買い物の時に着た御召のきものは京都西陣が主産地の織物である。米子様の話の中で、御召は「どうしても良いキモノ、いい加減な着物」に含まれているが、名前の由来は御召を好んだと言われる徳川11代将軍の「お召物」から来ており、男物も女物も式服を除いた一般人が着る織物としては最高級品とされてきた¹³⁾。明治時代から、色調が沈んだしっとりした上品な色目のものが好まれてきた先染めの縮緬である。

前出の真下百三郎氏は、男物御召を主に織っていた西陣機屋の梅周（主人梅田周太郎）での修行時代を下記のように回想している。

御召について¹⁴⁾（要約）

梅周は男物の無地、縞と夏の羽織用の絹と紗の着尺を専門に織っており、西陣御召を主力商品とする室町問屋矢代仁の伏機¹⁵⁾として、手機を30機ほど持っていた。矢代仁は得意先に三越を持ち、伏機の機屋は梅周の他に13軒持っていて、この13軒分の絹糸をまとめて横浜で安く購入していた。

当時、夏の羽織を粋に着こなしカンカン帽をかぶるというおしゃれは旦那衆の間で一種の流行だった。御召や麻の女物のキモノも少し手掛けていたが、男物と同じような細い柄のものが主流だった。

入店当時（1904 - 05年頃）糸染めはまだ植物染料で行われていたが、日露戦争（1904 - 05年頃）が終わって景気が戻った頃から、様々な色が出せる化学染料が出回りはじめ、御召の需要の増加に対応することができた。

御召は、明治末頃までは男物の需要が多く、無地に加えて、細い縞柄や10カマ（生地巾に対して同じ図柄が10個並ぶ小柄）くらいの大きさの紋織が多かったが、男性の洋装化が進むにつれて、女性を対象とした御召が徐々に増加し、柄もそれにつれて大きくなっていった。

1923-24 (大正 12 - 13) 年頃には 4 カマ、1925 (大正 15) 年には 1 カマ (生地巾 38cm に対して生地巾に対して生地巾方向に図柄のリピートの無い模様) の大きな革新柄が登場した。さらに昭和になると、金銀糸箔も使われるようになり、模様を入れて立体的にする縫い取り御召 (ジャカードのような絵羽、当初は実際に手で緯糸に縫いを入れたもの) が増加した。震災後頃から、すっきりした東京好みと、多色で量感を求める大阪好みが分かれてきた。

力織機は第一次世界大戦後の不景気が回復した 1920 (大正 9) 年頃から導入が始まった。力織機で織った御召は耳がきれいに揃ったが手織りの風合いとは違ってベタツとしていて、ちょっと安っぽく見えた。力織機で織ったものは、手織で織った商品の価格と比較して矢代仁の買値で一反あたり 20 銭安くなった。

御召王と呼ばれていた室町問屋矢代仁は、1923 (大正 12) 年には伏機を約 260 台持っていたが、最盛期の 1935 (昭和 10) 年頃には、伏機 100 台、仕入機 200 台、賃織 100 台に、自社の内機 350 台の合計 750 台の織機を支配するようになっていた¹⁶⁾。

当時、御召を大量に販売するのは大丸、高島屋、松坂屋で、高級品は三越が取り扱っていた¹⁷⁾。少量の超高級品は大阪の小大丸が扱っており、大阪をはじめ郊外に発展した御影、芦屋方面の上顧客の嫁入り支度品を扱っていた¹⁸⁾。御召は西陣を代表する商品であり、それなりの家庭の嫁入り支度には 10 枚以上は用意されるような重要な商品だったとある¹⁹⁾。桐生も御召を生産しているが、織が甘くて色が鮮やかであるため、西陣御召よりは格下だった²⁰⁾。戦後には十日町も生産するようになった。

図 1 は京都商工会議所による西陣織の統計である。当初機屋は西陣織物工業組合に所属していたが、1933 (昭和 8) 年に着尺を生産する機屋は西陣着尺織物工業組合に分離している。西陣着尺の生産の大半は御召と夏物であり²³⁾、昭和に入ってから生産数量は増加し 1935 (昭和 10) 年には約 143 万反に達する。しかし、西陣織全体から見ると着尺の比率は 1 割から 2 割程度である。

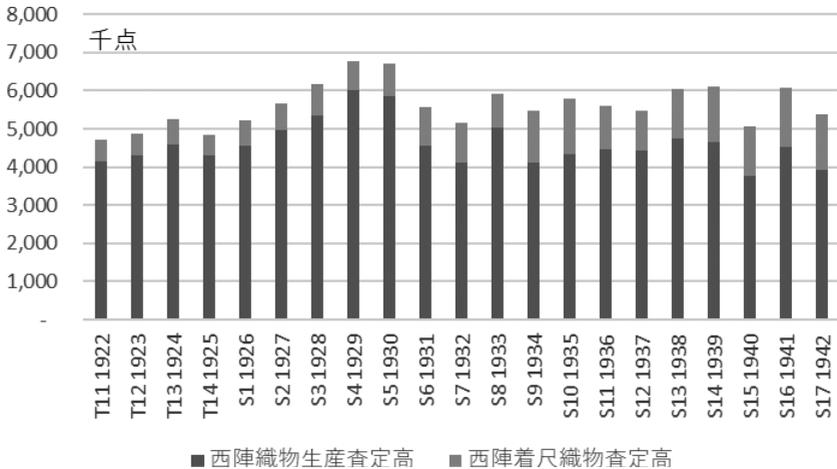


図1 西陣織物、西陣着尺織物生産査定高(点数)(輸出物は含まず)
 京都商工会議所統計年報 昭和6年²¹⁾、京都商工経済統計年報 昭和17年²²⁾より筆者作成

大半の西陣織物は、帯を中心として、袱紗地、肩裏地、金襴及び裂地、天鷲絨、肩掛け地及びマフラー地、ネクタイ地、家具用裂地など多岐にわたる²⁴⁾。昭和の後半に西陣織と言えば金襴の袋帯の生産に集中したため高級帯地のイメージがあるが、当時、西陣と言えば、金襴裂地、法衣などを除いては御召が一番高級品であった。帯は丸帯を除いては紋織片側帯、博多帯地、朱子帯地など普段使いの帯が大半を占めていた²⁵⁾。

図2を見ると、1938(昭和13)年頃から生産数量増加率に対して、生産金額が増加していることから、単価が上がっていったことが読み取れる。

徳川米子様の青海波の染帯は当時の流行に合わせて詠えたとあるが、円城留二郎氏によると、実際大正時代は染刺繍加工物の丸帯が全盛だったとある。これら礼装用に締められていた丸帯はその後儀式用となり、名古屋帯(松坂屋開発)や紋織片側帯が礼装用に締められるようになった。これらが戦後に合わせ袋帯になっていった²⁶⁾。米子様の大正時代の別詠えのつづれ帯²⁷⁾は西陣の高級手織り技法の一つだが、生産に非常に時間がかかるため、生産量は限られる商品である。

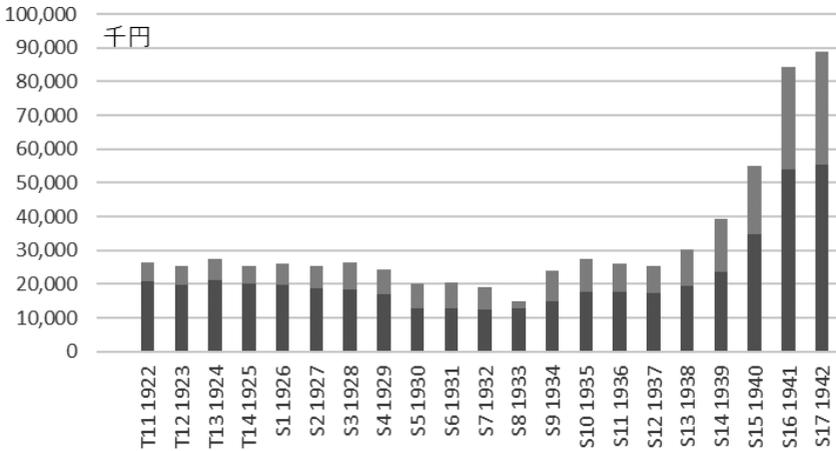


図2 西陣織物、西陣着尺織物生産査定高(金額)(輸出は含まず)
京都商工会議所統計年報 昭和6年、京都商工経済統計年報 昭和17年より筆者作成

6 西陣の力織機化

西陣の力織機導入は1882(明治15)年頃から始まるが、ほとんどは大量生産が可能な服地、裏地、傘地、コート地などの単純な商品や輸出商品を扱う新興織物会社が導入したもので、従来機業家には大正時代になっても力織機はなかなか浸透せず²⁸⁾、御召や帯の生産には高機(手機)やジャカードボタン機(模様を織り出せる手機)が永らく用いられていた。1919-1920(大正8-9)年頃から補助金制度などにも支えられ力織機化が始まったが、力織機が増加しても表1にみられるように手機数はなかなか減少しなかった²⁹⁾。

理由は、帯や御召をはじめとする着尺織物は模様の種類が多く、多品種小ロット生産のため力織機の大量生産には向かなかったというのが主な理由であった。特に帯地の大部分は複雑な組織で8色以上の緯糸を使っていたため、当時の力織機では対応できなかった。そのため、力織機に変えるというより、手織の紋織などの高級織物の開発が優先された。

表1は1935(昭和10)年の力織機と手機の台数を表示している。帯(西陣織物工業組合)に比較して着尺(西陣着尺織物工業組合)の力織機化が進

	内 機		出 機		合 計		計
	力織機	手織	力織機	手織	力織機	手織	
西陣織物工業組合	4,929	4,421	686	7,858	5,615	12,279	17,894
西陣着尺織物工業組合	2,249	50	2,099	222	4,348	272	4,620
計	7,178	4,471	2,785	8,080	9,963	12,551	22,514

表1 昭和10年の織機内訳 堀江英一『近代産業史研究』(1948)より

んでいる。織機はさらに、機業家が自社に持つ内機（うちばた）と機業家の下請のような形で賃織をする機を意味する出機（でばた）に分かれており、出機は西陣界隈の京都市内にあることが多いが、内機に比較して手織の零細経営が圧倒的に多かった。出機、賃織は西陣機業の特徴だが、戦後はこれが丹後地方（縮緬白生地産地）にまで広がっていくことになる。

7 その他の商品

徳川米子様の回想の中で、「どうでも良い着物」にも登場しないキモノとして当時大衆の間で人気のあった銘仙やモスリン、そして前時代から利用されてきた木綿がある。大正末から昭和にかけて、御召やこれらキモノの位置づけとして、巧趣苑高田利市氏は次のように述べている³⁰⁾。

(要約)

昭和の初めごろまでは、御召は式服（友禅模様染）を除いて最高級品であり中級品は紬糸使いの結城大島、中級以下が銘仙で、その下に水商売の染着尺があった。

銘仙は大正終盤から1920（大正9）年から1935（昭和10）年頃までが全盛期で、無地、縞、緋、経緯糸にプリントして緋柄に見える「ほぐし」など色、模様と、絹、人絹、交織など素材によって男物、女学生、女物向けなどがつくられ、素材によって様々な価格帯に分かれる関東織物である。1930 - 1931（昭和5 - 6）年が生産のピークで、年間約1300万反を記録している³¹⁾。戦後キモノデザイナーとして活躍した大塚末子（1902 - 1998）は、敦賀の鮮

魚問屋の娘で、「十五六の年ごろでは新しい着物と言えは銘仙くらいしか買ってはもらえなかった」と回想しており、大塚の母は「うちなどは模様もの（京友禅の縮緬）は笑われる」「こうした柄はお嬢さんと呼ばれる人の着るもの」と言って縞や緋を購入していたという³²⁾。また、戦前の映画スターの飯田蝶子（1887 - 1972）は銘仙について、下記のように回想している³³⁾。

銘仙（要約）

御召の小売価格が15 - 6円だった大正2（1913）年頃、銘仙は2円80銭くらいだった。当時の銘仙1反の相場は女中の一ヶ月の給料と連動していると言われていた。良い家庭では「お前には銘仙を着せて育てても、木綿物を着せて育てたことがなかった」などと言っていた。

銘仙は絹の中では安物扱いでも、木綿のキモノより上級品で安いものではなかったことが分かる。木綿は、前時代から庶民の普段着として自家で手織り生産した縞、格子、緋だったが、20世紀初めころから機械捺染の導入によりこれら織物の模様をプリントで表現した手間のかからない安価な木綿プリント生地や「友禅模様」と称した広幅の多色の綿プリントも大量生産されるようになり1935 - 1938（昭和10 - 13）年頃が全盛期だった。

モスリンは、柔らかくコシが無いため、防寒用として型友禅の襦袢や子供のキモノに多く使われていたようである。多少用途が違うが、銘仙より格下で、木綿より格上に位置する。モスリンは明治期に輸入が始まり急拡大するが1900（明治33）年頃から国産化が始まると輸入数量は減少し、1916（大正6）年に輸入は終了する。モスリンの国産化が進むと価格が下がり、さらに昭和に入って機械捺染でモスリン友禅が大量生産されるようになると、価格競争が中心となった。その後、国産は1932（昭和7）年まで増産が続いたが、原料のウールはすべて輸入に頼っていたため、その後は減少していった³⁴⁾。

8 室町問屋と大阪問屋

前出の三越の山崎氏は1937（昭和12）年に大阪三越に転勤しており、当時京都と大阪の問屋の特徴を下記のようにとらえたと言っている³⁵⁾。

（要約）

大阪本町の問屋は、銘仙、木綿、モスリン、スフ（ステープルファイバー³⁶⁾）など大衆呉服を中心に扱っていた。東京の問屋は大阪本町の問屋の支配下にあつて、仲間取引をしていた。これらの商品は機械捺染で大量にどんどん新作を作って、1か月も立てば見切つて値下げし、回転を早くする方法で利益を出していた。

彼らは広巾も扱っており、販売先は満韓支から遠く東南、アジア一帯、豪州、ニュージーランド、中南米諸国に広がっていたため、伊藤忠、伊藤萬などの大番頭にしても大阪紡績とか他産地との交渉が多く、そろばんよりも取引上の約束や協定などを計画的に立てることを主にした商売をする政商になっていた。

一方、京都の呉服問屋は友禅をはじめ高級商品の一つ一つ丁寧に作っているため、大店でも商人としてのスケールは大阪より小さく、しかしながら、純粹の問屋商人らしい商売だった。輸出も、基本は外地在留邦人が相手だったため、室町問屋の商売の主軸は小売店を相手にした商品本位の商売で、友禅、御召や日本各地の高級絹織物を扱う問屋が主流だった。

高級織物は、各社得意分野によって米沢もの、越後十日町、小千谷、結城、大島や、麻では宮古上布や小千谷縮、近江上布、能登、奈良の麻産地物など、意匠や品質に重点を置いた高級商品を扱っていた。

室町問屋の中には綿やモスリンを取扱うところもあったが、コストを追求した量産品となると、それらの商品は輸出入商売と合わせて大阪商社での取り扱いが中心となって徐々に減少していった。

このように商品の種類が増加し、価格の差が出てくる昭和初期には、貧富

の差が激しくなってきたが、前出の真下氏によると、昭和恐慌は上流階級には何の変化ももたらさず、それゆえ上流階級向け呉服を主に扱う室町にも西陣にも大きな影響は出ず、倒産は出なかったとのことである。もちろん、当時の商習慣は手形取引無し、不良品以外の返品無し、8時間労働制無し、などは回想当時と違い経費率が低かったことも経営が安定していた要因の一つと述べている³⁷⁾。

9 昭和初期の多品種化

大正の終わりから昭和にかけて、訪問着や羽織など新しい商品や、新しい組織の織物が次々と開発された。友禅下地もそれまでは強燃の縮緬各種しかなかったものが、弱燃の錦紗、パレスなどの種類が増えた。絹紡³⁸⁾は富士絹、鐘絹、三越絹などの各社のブランドが作られ、銘仙や裏地などに使われはじめた。

絹だけでなく人絹や交織物も生産された。人絹は昭和に入って糸が丈夫になり後加工も工夫され、木綿と絹の中間の素材として扱いが増えていった。人絹のほか、セル、スフなどは基本、品質が悪かったが、ウールや綿の輸入が途絶えると物資不足の一時しのぎ的な利用として、広く使われるようになった³⁹⁾。

様々に種類が増えた大衆向けの素材の中から、山崎氏は昭和初期に三越の店舗に並んだ夏物の商品を下記のように回想している⁴⁰⁾。

夏物素材と雨コート（要約）

藍染の結城、藍染の中形、明石、紹、紗、矢代仁の絹薩摩（注：前出の梅周の開発）、麻ものとして薩摩上布、能登上布、近江上布、奈良上布。帯は博多が主。その他、絹の唐織、紹、紗の長絹は紋付儀式用。訪問着用はつづれだけでは変化に乏しいので、平紹とか紹の生地、涼しげな流水や草花模様、霞などの柄を染めて、その上に刺繍した夏用の丸帯を発表した。夏物の訪問着も評判が良かったので、次第に力を入れるようになった。

雨コートは、当時はカッパとして綿や紬、銘仙など安いものが使われていて、キモノにふさわしいコートがなかなか無かったため、御召、楊柳、五大州縮緬（三越のブランド名）に防水加工を施して雨コートとしていた。千總の西村貿易からシャルマントとかミラネーゼ（フランスやイタリア、アメリカから広巾生地を取り寄せ、それを日本向きに織り直されたもの）と言ったブランド名をつけられた広巾ものや、価格のこなれた紋パレスに防水加工をしたものが大衆向けに大いに売れた。絹とウールの交織ものや、米沢のコート地、小巾織物のシャルムーズ（駒麩の紋縮緬の前身）もあった。昭和初期、雨コートは全盛を極めたので、毎年5、6月には商品を揃えた。

千總のシャルマントやミラネーゼなど、各社の独自開発素材にブランド名をつけることが昭和初期頃より活発になり、それらの素材に趣向を凝らした様々な模様をつけて売り出している。例えば、吉忠は日東紡のパラマックスを使用したスフのパラマウント着尺（モスリンの代用）のほか、津保美錦紗、美也古御召、彌生染着尺、紅雀モスリン、紅雀セル、彌生錦紗、やよひ絹友仙、やよひ絹麻、寿黒（紋付）、など発表し⁴¹⁾、市田は明治時代より「ブドー」を冠したブドーセル、ブドーモスリン等を発売していた⁴²⁾。外市商店では、真砂染（京染小紋）、雲居染（黒紋付）、初桜染（裾模様）、加茂川染（京友禅）、みくに錦紗（新繊維）、衣笠御召などのブランドを発売している⁴³⁾。その他、八千代着尺（純毛モスリン）、若松錦紗（人絹）、小濱錦紗、京彩染、京美染などがあった。これらブランドが付けられている商品の多くは、大衆向け大量生産品である。

小売店の三越も前出の五大州縮緬をはじめ、足利産の人絹と絹を交織した素材に友禅加工をした「三越りゆうぜ」というオリジナルの大衆商品を作り出した。これは30円から40円する正絹京友禅や三越の古い帯地柄を参考にした模様にながら、10円から12 - 13円までの低価格で販売されたため、銘仙の上に着る羽織として1933（昭和8）年頃から1937（昭和12）年頃まで爆発的に売れた⁴⁴⁾。当時、都会での人々の着こなしについて下記のような記載がある。

小大丸社史⁴⁵⁾による昭和初期の大阪の様子（要約）

男性の和服は家庭でも利用範囲が狭くなった。夏の浴衣、冬の丹前は家庭での必須アイテムとして残っているが、じんべ、はんそで、とんびなどは一部に限られるし、かみしも、あつし、はっぴ、はんでん、角帯などは洋服に変わってしまった。女性の和服は派手なものが好まれ、御召、木綿、モスリンはすたれ、銘仙が歓迎された。着ると優美に見えるうえ、染直しができる錦紗や人絹（の友禅）も流行した。訪問着は総模様となり、織物も金糸、銀糸を織り交ぜた裾模様など、高価なものが現れた。

大塚末子による 1933（昭和 8）年頃の東京の様子（要約）⁴⁶⁾

1929（昭和 4）年の上京時に持ってきたキモノは濃いあずきの緋の御召と黒い紋付の羽織、非縮緬の長襦袢だけだったが、その頃の東京では、女のきものの柄は目立って華美になっていた。濃艶、絢爛とでもいうか、うるし糸や金糸銀糸が織物に入っている豪華な、まるで長襦袢のような大きな派手な色彩だった。羽織は、肩から裾へかけて大きな模様の染め出された絵羽織で、和服コートにはシフォンベルベットが流行っていた。銀座では、銀ぎつねの襟巻に頬をうずめた母親は、黒字に青蝶貝入りの漆の紋付羽織を着て、娘は綸子の総絞のあでやかな長い袂の絵羽織を着ていた。（中略）。田舎者の私は、ふだんにこんな贅沢なものを着る都会人は、いったい外出には何を着るのだろうと、ただあきれるばかりだった。

当時は、まだ都会と田舎の差もかなりあったようであり、特権階級から金持ち、一般人と社会階層の広がりとともに、着物の階層も増え、豪華になっていたことが伺える。

他に、筆者の父が子供の頃（1930年代後半）に、母親と叔母が行李に詰まった反物を広げては、「この間、この銘仙を買った」などと購入した商品を見せ合い、話していたのを覚えているという。その後一家は京都から引越し、疎開し、戦後に父が気付いたときにはその行李はすでに無かったという。お

そらくすべて食べ物に変わってしまったのだらうと回想していた。当時中流以上の家では、いつでもキモノに仕立てられるように反物をたくさん持つ時代だった。当時の反物はしばらく生地のまま持っていても流行が去るものでもなく、また自分のキモノとして仕立てなくても、他の用途にいろいろと利用できるものだった(実際最悪の用途だが、食料品と交換することができた)。

10 返品始まり

以上見てきたように、震災以降、百貨店も問屋も取扱商品の種類が増えた上、それまでの「地味さと渋さ」を主としたものから華麗と豪華なものへ急激に変わっていった。顧客層を広げるために流行発表会で毎年、テーマを決めた流行も作られて行く一方、人絹をはじめとする低価格繊維や人造繊維も出回り始めた。そのため、品質管理がおろそかになることもあり、難物も出回り出した。難物であれば当然問屋に対して返品は行われるが、三越の山崎氏はこの時期日本橋の三越では、難物以外の返品も始まったと回想している⁴⁷⁾。

(要約)

大阪問屋の扱うような大衆商品は1割2割値引きしたらすぐ右から左に売れるけれども、京都の商品は値引きしても売れないものは結局売れない。京物はそれほど商品に対して細かい注意を払う必要がある。返品は当初シミなどの難が見つかった場合だけ限定されていたし、検査漏れ等で半年後に見つけても返品するという事は無く、三越が責任をもって処分していた。

当時三越の取引問屋は決まっていたが、震災後に新規の問屋との取引が増えると、売れる問屋の品物は次々と回転するが、売れない問屋の商品はずっと店頭に残るといった状況が発生し始めた。すると売れない問屋の店員がやって来て、「うちにも売れるものがあるので、売り場の品物と入れ替えて欲しい」という話を持ち込んで来た。三越ではそう簡単に商品を入れ替えることはできなかったのだが、問屋が

入れ替えてしまった。つまり、商品代金が支払われたものを問屋が持ち帰ったのだから「返品」である。

返品は、こういうことが契機になって、問屋の方から売れ残っている商品を売れる商品と入れ替えるということで始まった。商品を入れ替えると、今まで売れなかったその問屋の商品が急に勢いづいてどんどん売れる。三越の仕入れ方も助かるし、見切る必要もなくなり、数字もあがる。いけないことだと知りながら止められなくなってしまった。

百貨店の委託⁴⁸⁾ 返品問題は、戦後に業界の習慣となり、昭和後半には問屋の資本、営業の根幹を揺るがす大問題となっていった。しかし、氏の言い分では、当時これは問屋側から提案されたことであり、また、商品を良く販売する日本橋の三越だけに提案されたことだと言っており、大阪高麗橋の支店のように販売力の低下した店で残った商品は本店で処分していたと述べている。前出の真下、円城両氏も返品は、室町の本店と本当に良く売っていた三越本店の間に限った話で、戦前にはほとんどの小売店が現金で支払っていたと言っている⁴⁹⁾。

一方で、当時このような売れない商品を店頭から引き揚げて新しい商品と入れ替えると事が出来る問屋は、それだけの資金の余力があったということであり、さらにはその引き上げた商品の次なる納品先が確保できていたということである。

11 戦時下へ

1937(昭和12)頃まで戦況は良く、室町問屋は国内同様、満州から北支(那)にかけての需要が増え市場が拡大し、大店は大陸に支店を開いていった。百貨店は勢力を拡大し全国各地に店舗を作り始め、室町問屋はその地方百貨店と特約の形を取り、資本を投下した。(資本協力した問屋の商品を専門に、又は優先して仕入れる)。室町の主要商品の絹は国内生産だったため、当初は輸入品を扱う他産地に比較して景気は良く、さらにその絹物は出征する前

1933 (昭和8) 年		商業組合法、工業組合法、(強制加入)
1937 (昭和12) 年		暴利取り締まり令
1938 (昭和13) 年		禁綿 繊維製品配給統制令
1939 (昭和14) 年	10月	マル公「価格統制令」
1940 (昭和15) 年	7月7日 10月7日	七七禁令、奢侈品等製造販売制限規則 奢侈品製造(加工を含む)禁止が始まる 奢侈品販売禁止が始まる
1941 (昭和16) 年	10月	企業整備要項が通達
1942 (昭和17) 年	1月	繊維製品配給消費統制規則が交付
1943 (昭和18) 年	10月	第二次企業統制令 絹中配は日本織物統制株式会社となる
1946 (昭和21) 年	9月	織統閉鎖
1947 (昭和22) 年	9月	登録制による業者の復活
1949 (昭和24) 年		一絹織物の価格統制解除
1950 (昭和25) 年		衣料切符制廃止

表2 満州事変以降の繊維織物に関する法令、統制

の青年の婚礼増加、つまり嫁入り支度品として生産販売は急増した。

しかし、1931(昭和6)年の満州事変頃から統制経済が少しずつ開始され、1933(昭和8)年には商業組合法、工業組合法により企業はどこかの組合に属さなければならなくなった。百貨店は1937(昭和12)年頃から順次展覧会を中止しはじめ、自由な取引が出来なくなっていった。表2にある通り、1938(昭和13)年に繊維製品配給統制令、1939(昭和14)年にマル公「価格統制令」、そして1940(昭和15)年には奢侈品等製造販売制限規則、俗称七・七禁令が施行され、室町の商品はほとんどがこれに該当することになり、室町問屋の展示会は1940-1943(昭和15-18)年にかけて中止せざるを得なくなった⁵⁰⁾。大陸に開設した支店は急拡大するが1944(昭和19)年頃から休業、廃止、引揚げとなった。

12 まとめ

1930年代後半(昭和10年代)から京都呉服業界はますます発展する様子

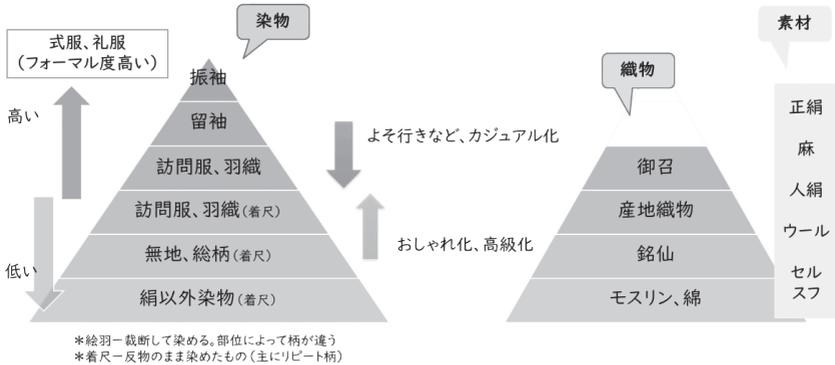


図3 京都室町取扱商品構成図 (左: 友禪を中心とした京染、右: 織物、新素材)

があつたにもかかわらず、戦争で中断されることとなってしまった。ここに向かう大正から昭和戦前までの室町は、第一次大戦、関東大震災、昭和恐慌と景気の浮き沈みを何度も潜り抜けてきたが、その間、商品の種類は増え、同一種の商品であっても素材や模様などで高級品から低級品までバリエーションが広がり顧客層が増加した。友禪染の広がり様子は前稿で友禪の階層図⁵¹⁾として発表したが、そこに今回取り上げた、西陣織物、御召をはじめ、主に大阪問屋が扱った大衆の銘仙、モスリンと、絹以外の商品を付け加えたものが図3である。

西陣御召は男物主流の織物として最高級品として存在していたが、大正時代に女物として発展し、徐々に模様が大きくなり、縫取などを施して豪華になる一方、人絹や交織などの利用により値ごろなものも作られた。昭和に入り、室町は高級品と大衆向け高級品に特化していくこととなって行った。

好景気と売上げの増加は特権階級、富裕層の増加と、それ以上に室町の商品を購入することができる一般大衆の増加だった。昭和10年代に無地染めを含めた京染の生産量は年間1000万反を超え⁵²⁾、その後も戦争で生産が中断するまで生産増加を続けた。西陣織の生産ピークは1929 - 1930(昭和4 - 5)年頃で、年間約700万反に達し、その後微減している。

商品数やアイテム数を広げ、華美になりながら生産増加を続けていた室町の商品が戦争中の奢侈品製造販売制限規則で突然中断させられてしまったことは室町にとっても消費者にとっても、耐え難いことだったと推察する。そ

の後も、価格統制、衣料切符制度、企業統制と締め付けが厳しくなり、女性は日々モンペを着る生活となり、終戦になっても登録制など自由な営業ができない時代が続いた。やっと自由になっても今度は物資が不足した。

1957（昭和 32）年発行の織商 10 周年記念誌^{53）}では、昭和初期から昭和 13 年までの室町が京都織物卸市場の全盛時代であり、染織技術も最高を誇っていたと記している。この時点で、室町は戦前のように業界を復活させようと努力を重ねている途上であったということが、今回利用した多くの資料から読み取ることができた。戦後は呉服を着る人口が明らかに減少していったが、戦前の昭和時代（1926 - 1940 年）は高級品や大衆品の呉服を求める人口が増加し続けた、呉服の全盛時代だったのである。

註

- 1) 『そめとおり』(1977) 9 月 321 号. p.53.
- 2) 『そめとおり』(1954) 2 月 32. p.27, 『そめとおり』(1954) 3 月 33. p.39.
- 3) 『そめとおり』は 1946 年設立の染織新報社が 1952（昭和 27）年から発行する織維染織全般の月間専門誌。読者は全国専門小売店。現在は和装総合誌。
- 4) 『そめとおり』(1966) 11 月 192 号. pp.60-63.
- 5) 『そめとおり』(1967) 9 月 202 号. pp.32-34.
- 6) 1960 年代初め頃に成人式ブームが始まった頃、中振袖がブームになったことは、この戦前の中振袖のイメージが流行の原動力だったと考えられる。
- 7) 『そめとおり』(1967) 9 月 202 号. p.34.
- 8) 岡本. (2023). pp.59-62.
- 9) 大丸研彩会、松坂屋染織名作展、高島屋百選会、など昭和に入って増加する
- 10) 『そめとおり』(1954) 2 月 32 号. p.28.
- 11) 『そめとおり』(1965) 5 月 174 号. pp.30-33.
- 12) 岡本. (2023). pp.65-69.
- 13) 『そめとおり』(1978.) 10 月. 334 号. p.187.
- 14) 『そめとおり』(1977) 9 月 321 号. pp.52-55, 『そめとおり』(1977) 11 月 323 号. pp.71-74, 『そめとおり』(1978) 2 月 326 号. pp.91-94.
- 15) お召の矢代仁と呼ばれる御召専門室町問屋。伏機（ふせき）と言うのは特定の間屋から糸の支給を受けて問屋のオリジナル商品を専門に織る機、又は機屋を指す。梅周の機はすべて矢代仁の伏機
- 16) 堀江. 1948. pp.139-140.
- 17) 『そめとおり』(1978) 2 月 326 号. p.91.
- 18) 『小大丸式百年のあゆみ』(1964). pp.145-151.
- 19) 『そめとおり』(1978) 10 月 334 号. p.187.
- 20) 『そめとおり』(1978) 11 月 335 号. p.121.
- 21) 『京都商工会議所 統計年報昭和 6 年』. (1932). pp.150-151.
- 22) 『京都商工経済統計年報昭和 17 年』. (1943). pp.49-50.
- 23) 堀江. 1948. p.136.

- 24) 堀江. 1948.
- 25) 『京都商工会議所 統計年報昭和6年』. (1932). pp.150-151., 『京都商工経済統計年報昭和17年』. (1943). pp.49-50.
- 26) 『そめとおり』(1978) 11月. 335号. p.122.
- 27) つづれ織は模様に合わせて緯糸を必要な部分の経糸だけに織り込む。そのため篋は使えず、爪や専用の櫛で緯糸を織り込んでいく
- 28) 堀江. 1948. p.101. 新興以外の1社は矢代仁
- 29) 黒松. 1969. pp.138-140.
- 30) 『そめとおり』(1978) 11月335号. p.125.
- 31) 伊勢崎銘仙アーカイブス.
- 32) 大塚. 1958. p.35. p.37.
- 33) 『そめとおり』(1965) 12月181号. pp.50-53.
- 34) 池上. p.178-185. 白石. p.174.
- 35) 『そめとおり』(1965) 7月176号. pp.50-54.
- 36) スフはステープルファイバーの略で主に人造繊維のレーヨンを短く切断したものの。紡績して糸にして樹脂加工したものを指す
- 37) 『そめとおり』(1978) 3月327号. p.144.
- 38) 絹は通常フィラメント(長繊維)なので、紡績を必要としない。フィラメントとして使えない短繊維を紡績した糸。『そめとおり』(1965) 2月171号. pp.35-41.
- 39) 当時唯一、高級感のある商品に仕上がったのは、絹地に人絹のパイルを使ったシフォンベルベットであった。『そめとおり』(1965) 2月171号. p.37.
- 40) 『そめとおり』(1965) 5月174号. pp.25-30.
- 41) 『そめとおり』(1954) 11月42号. pp.76-80.
- 42) 『そめとおり』(1954) 10月41号. pp.77-90.
- 43) 『外市 創業150年—継いで伝える感謝の心』. 2001. p.27.
- 44) 『そめとおり』(1965) 10月179号. pp.26-33.
- 45) 『小大丸式百年のあゆみ』1964. pp.168-169.
- 46) 大塚. 1958. pp.62-63.
- 47) 『そめとおり』(1965) 7月176号. pp.54-57.
- 48) 委託：商品を仕入れず、商品を百貨店に預けて販売してもらう。商品が売れた段階で百貨店は仕入れを計上する。
- 49) 『そめとおり』(1977) 10月322号. p.78., 『そめとおり』(1977) 3月327号. p.144.
- 50) 『そめとおり』(1954) 4月34号. pp.55-57.
- 51) 岡本. 2023. p.69.
- 52) 岡本. 2023. p.62でまとめた表より.
- 53) 『織物卸市場の概況』. 1957. p.111.

参考文献

- 『京都商工会議所 統計年報昭和6年』(1932). 京都商工会議所.
『京都商工経済統計年報昭和17年』(1943). 京都府商工経済会.
「近代室町発展史第二回」『そめとおり』32号(1954.2). 染織新報社. pp.27-29.
「近代室町発展史第三回」『そめとおり』33号(1954.3). 染織新報社. pp.39-41.
「近代室町発展史第四回」『そめとおり』34号(1954.4). 染織新報社. pp.55-57.
「創業八十年を迎えた市田株式会社足跡」『そめとおり』175号.(1954.10). 染織新報社. pp.77-90.
「星霜八十年・京都の生んだ吉忠株式会社の横顔」『そめとおり』174号.(1954.11). 染織新報社. pp.78-80.

- 『小大丸式百年のあゆみ』(1964). 株式会社小大丸.
- 「近代呉服の歩み (16) 人絹の出現より合織迄 赤札制度と商売の変化 三越勇退の山崎肇氏の話」『そめとおり』171号. (1965.2). 染織新報社. pp.35-41.
- 「近代呉服の歩み (19) 初夏を香で呼ぶ本藍染 鷲進の雨コートと加工帯 三越勇退の山崎肇氏の話」『そめとおり』174号. (1965.5). 染織新報社. pp.25-33.
- 「近代呉服の歩み (21) 東西商人気質の長と短 京都問屋が教えた返品 三越勇退の山崎肇氏の話」『そめとおり』176号. (1965.7). 染織新報社. pp.50-57.
- 「近代呉服の歩み (24) 返品は業界のアヘン中毒 三越りゆうぜの話」三越勇退の山崎肇氏の話『そめとおり』179号. (1965.10). 染織新報社. pp.26-33.
- 「スター師走夜話 新しいキモノは邪道 キモノの常識を向上して欲しい 飯田蝶子さんの話」『そめとおり』181号. (1965.12). 染織新報社. pp.50-53.
- 「大正期の再興華族 訪問着は縫い紋と軽蔑 披露宴は色留袖になさい 元侯爵徳川米子夫人のお話」『そめとおり』192号. (1966.11). 染織新報社. pp.60-63.
- 「近代呉服の歩み (44) 祭礼の半天見たい… 中振袖の創生期と発展史 三越勇退の山崎肇氏の話」『そめとおり』202号. (1967.9). 染織新報社. pp.32-37.
- 「近代西陣お召の歩み (第一回) 日露戦争と国力上昇の時代 西陣 真下百三郎」『そめとおり』321号. (1977. 9). 染織新報社. pp.52-55.
- 「近代西陣お召の歩み (第二回) 最大の恩人、田中支配人の話 西陣 真下百三郎」『そめとおり』323号. (1977. 11). 染織新報社. pp.71-74.
- 「近代西陣お召の歩み (第六回) 男は洋服へ 女は御召へ 西陣 真下百三郎」『そめとおり』326号. (1978.2). 染織新報社. pp.91-94.
- 「近代西陣お召の歩み (第七回) 恩人田中さんの他界 戦前の御召黄金期 西陣 真下百三郎」『そめとおり』327号. (1978.3). 染織新報社. pp.144-146.
- 「近代西陣お召の歩み 後編2回 十一代将軍のお召物より 高貴な素性と品格が 巧趣苑 高田利市」『そめとおり』334号. (1978.10). 染織新報社. pp.187-189.
- 「近代西陣お召の歩み 後編3回 お召は上級、結城は中級 きものには階級がある 巧趣苑 高田利市」『そめとおり』335号. (1978.11). 染織新報社. pp.123-125.
- 「近代室町の歩み (37) 今は風船玉の経営 昭和初期不況と室町 ヤマサン会長 円城留二郎氏談」『そめとおり』322号. (1977.10). pp.76-79.
- 「近代室町の歩み (50) 最高衣料は織物!! お召の衰微と染の自惚れ ヤマサン会長 円城留二郎氏談」『そめとおり』335号. (1978.11). pp.120-122.
- 『外市 創業150年一継いで伝える感謝の心』(2001). 外市株式会社.
- 伊勢崎銘仙アーカイブス <http://iga.justhpb.jp/toukei.html>. (2023年5月27日アクセス).
- 池上正一, (1926)『モスリンと其取引』プラトン社.
- 大塚末子, (1958)『きものと私』春陽堂書店.
- 岡本慶子, (2023)「昭和の室町商人と職人達—友禅とイノベーション—」『国際日本学』第20号. 法政大学国際日本学研究所. pp.47-78.
- 織協創立十周年記念誌編集委員会, (1957)『織物卸市場の概況』京都織物卸商協会.
- 黒松巖, (1969)『西陣織業—現状とその問題』京都市経済局.
- 白石孝, (1994)『日本橋・堀留 東京織物問屋史考』文眞堂.
- 堀江英一, (1948)『近代産業史研究』日本評論社.

<ABSTRACT>

**Muromachi Merchants and Artisans
in the Japanese Kimono Industry
During the Early Showa Period 2
:Silk in the Mass Market**

OKAMOTO Keiko

In the previous paper, the author examined the Kyoto textile industry in the first half of the twentieth century focusing on yuzen dyeing. It did not provide a fuller sense of the industry because the paper did not cover woven textiles that merchants dealt with, such as textiles made in the Nishijin district in Kyoto or in other production centers throughout Japan.

In the meantime, when collecting postwar archives, it was found that many articles discussed the pre-war industry and its products. From those articles, the author strongly felt that post-war merchants and artisans were trying to revive the industry to the pre-war prosperity. In order to better understand the post-war kimono business, it will be worth to learn the pre-war kimono industry operation.

Based on those articles, the findings are compiled as a research note. First, recollection by Mrs. Yoneko Tokugawa, a privileged woman in the pre-war period, and by a former Mitsukoshi Department Store employee, presents the kimono of the upper-class during the 1920s and the 1930s. Then expanding mass-market merchandise brought by Muromachi merchants and Nishijin weavers are introduced.